

# 全国自閉症者施設連絡協議会 第7回大会 報告書

- 期 日 平成5年11月18日(木)～19日(金)
- 会 場 リコホテル福岡
- 主幹施設 社会福祉法人 のぞみの里 志摩学園
- 事務局 社会福祉法人 檜 の 里 あさけ学園

## < 目 次 >

1. プ ロ グ ラ ム	.....	1 ページ
2. メ ッ セ ー ジ	.....	4
3. 中 央 情 勢 報 告	.....	6
4. 分 科 会 報 告	.....	13
5. 記 念 講 演	.....	22
6. 参 加 施 設 名 簿	.....	34

## プログラム

- 開催の趣旨 自閉症者が人間として生きるための発達保障と、自立ならびに社会参加のための実践と研究を推進し、さらに、これに参画する者の研鑽と相互交流を促進することを目的とする。(会則より抜粋)
- 大会テーマ 『自立を目指して』
- 期 日 平成5年11月18日(木)～19日(金)
- 会 場 リコホテル博多  
(福岡県福岡市中央区渡辺通り1丁目 ☎ 092-524-3333)
- 主 催 全国自閉症者施設連絡協議会
- 後 援 福岡県、福岡市、志摩町、福岡県社会福祉協議会  
志摩町社会福祉協議会、西日本新聞民生事業団  
社団法人・日本自閉症協会、日本自閉症協会福岡県支部  
九州・山口自閉症児者施設連絡協議会  
福岡県精神薄弱者施設協議会
- 大会日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
11月18日(木)				受付	開会式	中央情勢報告	分科会	会	休憩	懇親会
11月19日(金)	分科会報告	記念講演	閉会式	施設見学						

第1日目(11月18日)

12:00 受付  
分科会打合せ

13:00 開会式  
開会挨拶 (社福)のぞみの里理事長 西山 陽雄  
会長挨拶 (社福)檜の里理事長 石丸 晃子  
来賓祝辞 福岡県知事代理  
福岡県民生部次長 稲吉 良蔵  
(社)日本自閉症協会会長 東海 敬

14:00 中央情勢報告 「心身障害者対策基本法の改正と陳情活動」  
(社福)檜の里理事長 石丸 晃子  
「福祉政策全般の動向と自閉症問題」  
(社福)嬉泉 常務理事 石井 哲夫

14:30 分科会

第1分科会：「行動障害の著しい人たちの対応について」

発表者 袖ヶ浦ひかりの学園 沼倉 実(担当施設)  
星が丘寮 寺尾 孝士  
助言者 あさけ学園 奥野 宏二  
司会者 めぶき園 五十嵐康郎

第2分科会：「作業の意義について(療育・労働・生活の視点から)」

発表者 泰山寮 柴田 弘二  
くさぶえの家 和田 信也  
助言者 塚脇学園 谷川 正文  
司会者 三気の里 土井 尚典(担当施設)

第3分科会：「施設と家庭の連携について(外泊について)」

発表者 すだちの家 廣部 和夫  
南材ホーム 松浦喜美枝  
助言者 袖ヶ浦ひかりの学園 石井 哲夫  
司会者 うさか寮 北川 忠(担当施設)

第4分科会：「余暇・趣味について」

発表者	厚田はまなす園	村田 泰之
	第二ともえ学園	井出迫俊彦
助言者	みずほ学園	森本 照雄
司会者	第二ともえ学園	吉田 一誠 (担当施設)

18:00 懇 親 会

---

第2日目 (11月19日)

---

9:00 分科会報告

10:00 記念講演 「自閉症児者と心の自立をめぐる」  
— 幼児期と青年期の臨床経験から —  
大分大学教育学部助教授 小林 隆児

11:30 閉 会 式 会長挨拶 (社福) 檜の里理事長 石丸 晃子  
次期主幹施設挨拶 星が丘寮施設長 寺尾 孝士  
閉会挨拶 志摩学園施設長 大久保郁哉

12:00 解 散

---

志摩学園見学 (希望者による)

---

13:00 施設見学 (社福) のぞみの里 志摩学園  
福岡県糸島郡志摩町馬場1079-1 ☎ 092-327-2929

作業の様子、居住棟・多目的ホール等の見学

15:00 現地解散

## 演題 「自閉症児者と心の自立をめぐる」 — 幼児期と青年期の臨床経験から —

大分大学教育学部助教授 小林 隆児  
(現東海大学教授)

### I. はじめに

本日は、熱心に自閉症の人々の療育に携わっておられる全国の皆さんの前でお話する機会をいただきましてありがとうございます。

私が最近感じますのに、多数のお子さん達と小さい時からずっとお付き合いしてきた中で、あの時彼らはこんな気持ちだったのかとか、こんな感じ方をしてたのかとか、やっと自分なりに理解の深まってきた部分があります。結局彼らから教えてもらったことばかりですが、このように直接彼らが語ってくれない部分をわれわれは彼らの代弁者としてどう理解していったらいいのか、お話していこうかと考えています。話の筋としては、長年お付き合いしたお子さん達から学ぶことによって、今後小さいお子さんにお会いする場合にどういうふうに援助をしたらより望ましい方向に行くのか、実際に自閉症の早期治療をどうすれば彼らの苦悩を減らせるのだろうか考えてみたいと思います。

### II. 『自立』の問題をどのように考えたらよいか

タイトルを「自閉症児者と心の自立をめぐる」とさせていただきます。このうちの『自立』という言葉は何かにつけてよく使われていますが、特にここで「心の自立」とことわったところに大きな意味があるわけです。

広辞苑で『自立』を調べてみますと、「他の援助や支配を受けず、自分の力で身を立てること」と書いてあります。単純に「経済的自立、社会的自立」とも言い換えられます。しかしこうなると、私自身が本当に自立しているのだろうか、しばしば誰かに援助をされて、時には支配されているような気持ちになることさえあります。そういう意味では自立していないといえるかもしれません。つまり、この定義で自立を考えていくと現状は大変厳しいわけです。一般的に「他の人から助けを借りないで、独力で何事でも行えるようになること」となってしまうようです。また英語では『自立』をindependenceといいます。dependenceは日本語で『依存』といいますので、依存から脱却した状態がindependence(自立)となります。だからベースには当然依存があり、それから先に『自立』がくるわけです。

それでは自閉症と呼ばれているお子さんたちにとって、『自立』はどのように考えたらいいのか。おそらく皆さんも施設で彼らに接する時、それぞれ意味合いは違うかもしれませんが、大義名分は「彼らの自立のために援助する」とおっしゃるでしょう。しかし自閉

症と呼ばれるお子さんの障害の程度をみると、極めて重い、発達指数でいえば一桁台の方から、super-excellent（超優秀）な方までいます。障害の程度は実にさまざまです。そういう方々をすべてひっくるめて自閉症という範疇でくくり、彼らの『自立』を考えようとすれば、大変むずかしい問題となるのです。

そこで私は『自立』について、次のように考えたいと思っています。

自閉症の最も中核の障害というのは、生まれてごく早期から対人交流がうまくもてないことで、対人交流の形成が最初の段階で障害を受けて、その後いろいろ悪戦苦闘するけれども、なかなかうまくいかないために、後々にわれわれも苦労するようなさまざまな状態に変わっていくのだと考えています。乳児に対人交流が芽生え、育ってきているのを一番早く感じとるのはお母さんです。それは子どもが母親に甘えてくる、いわゆる依存（dependence）という状態であります。その母親に甘えを示さないということで、だいたいみなさんはお子さんの異常を感じられるようです。彼らはこのことがなかなかできなかったお子さんたちだろうと思います。それは知的に優秀な方でも重度な方でも、多少程度は違うにしても一致していると考えます。こうした甘えるという関係が乳児期早期に形成されないと、その影響はいろいろな形で現れてきます。そういうことができず、後々までずっと引きずって行く苦悩というのはどんなものなのか、そのことに私は一番の関心を持ち、理解しようと試みてきました。その中で「心の自立」とは、人間が究極的に心の拠りどころをどこに求めるのか。人間はみんな苦しい時には必ずどこかに拠りどころを求め、そこで自分は救われ、安心感を得る。そしてまた立ち上がっていけるということになります。それでは自分の拠って立つ基盤とは何か。それは自閉症のお子さんだけでなく、われわれにとっても同じような問題を抱えているわけです。けれども、それが非常に鮮明な形で出てくるのが彼らだろうと思います。われわれはそういったものをごく当たり前で獲得しているような気もしますが、実際にはどのように形成されるのか、彼らとのつき合いを通じて少しづつわかってきたように思います。

### Ⅲ. 自閉症の人々の抱えている不安とその背景

次に彼らの抱えている不安とはどういう性質なのか、そしてそれはどんな背景をもつか、考えてみたいと思います。

小学校の高学年ぐらいになってくると、非常に良く話せる方が出てきます。そこで自分のことも少し話してくれるsuper-excellentなお子さん、11歳の時、面接で話したことがあります。その方は3歳の時から、土曜学級というボランティア活動で一緒だったのですけれども、自分の小さい時のことを語ってくれたのはその方だけでした。

彼はこんなふうに言いました。「小さい頃はもうどうだったね」と聞いたところ、「昔は自閉症だったから」「今と違ってブツブツ言ってた」「ポーッとして訳のわからんことを言いよった」。さらに「人の話はもうどういうふうにも聞こえなかったね」と聞くと、「とにかくわからなかった」「ただむずかしいことばかり言ってたという感じだった」「ただまわりがワアワア言ってるとうしか聞こえなかった」というのです。ただザワザワとした感じだったそうです。とてもクールなタッチで話すのですが、「じゃ、いつから人の話がわかるように

なったの」と聞いてみると、「6歳から7歳くらいにかけてわかってきた。そして、わかってきたら自分が落ち着いてきた」と言っていました。「どうしてわかるようになったの」と聞くと、「本を読んだりして単語を覚えてから、どんどんわかるようになってきた」と言うのです。電話やテーブルとかのことばがわかるようになり、徐々に落ち着いてきたそうです。ここが重要なポイントと考えられます。けれどもまだ11歳ですし、私も好奇心で聞くのは失礼だと思いましたので、それ以上深く聞きませんでした。

世界的には、過去の回想を語った自閉症の人々の本が何冊も出ています。その中で、精神科医 Bemporad, J. R. が30歳になった方の昔の回想をまとめた論文の中に、非常に注目すべき箇所がありました。『それは耐えがたい騒音とすさまじい匂いの世界である。生き物は特にそうであった』『他の子どもが自分に危害を加えるのではないかと、そういう恐怖心がいつもあった』『教室では自分がこなごなになってしまいそうな、そういう非常に恐ろしい経験をしていた』と言うのです。もちろん楽しい経験もあったと言っています。しかしこの恐ろしい経験の内容に、私は強く共感を覚えました。彼らの行動面については、それを問題行動とラベリングしながらみる人が多く、問題行動ないしは不可解な行動としてとらえられがちです。彼らもわれわれと同じような心をもった存在であることを無視している方が、意外に多いと思うのです。やはり彼らも内的世界を当然もっているわけです。われわれはそれを以前は推測する術さえもっていなかった。そのために行動面だけ追っていたような気がします。

それでは、彼らがどういうふうに戻りの世界を見ているのか。私も研究者の端くれですから、少しでも具体的に目に見える形で世に問うことをしないと、単なる思い過ごしになってしまいます。私にとって非常に幸いだったのは、当時はまだ学生で土曜学級というボランティアサークルに属していました。病院の診察室で、かしくまって治療者と患者の関係でお会いするのとは全然違うわけです。そういう関係がベースにあるので、割とざっくばらんにいろいろな話を聞くことができましたし、心理検査をしても協力的で、自分をよく出してくれたような気がしています。

彼らの心の中を探っていく方法のひとつとして、一枚の絵を見せて自分でストーリーを作ってもらい、CATという検査があります。これはお子さんの動機づけを高めるためにリスを主人公にした絵を描いて、ある場面を示すわけです。例えば家族がみんな一緒に食事をしている場面を見て、みんなが何をしているのか、どうしてそんなことをし始めたのか、この後どうなるのか、過去、現在、未来にわたるストーリーを作ってもらい、そのストーリーを展開していくことにより、その人の心の中を探ろうとする検査です。当然、彼らにとってはむずかしい課題ですが、非常に少ない反応の中にもさまざまなことを教えてくれるのです。

この中に比較的よく話してくれた少年がいました。この人も小さい時からおつき合いしていて、今は立派に働いています。やはりこの方とお会いして検査したのが11歳の時でした。運動会の絵—いろいろな動物がかけっこをしている場面で、転んでる子や一所懸命走っている子やまわりで応援している動物がいて、テントも張ってあり、一目見て誰でも運動会の場面とわかるものです。この絵を見て、「これがリスのチロちゃんかな」「これは何かよくわからん」「チロちゃんがトップを走っている」「カメがピリだ」とか言うわけです。そこで私が「ここはどこかな？」と聞いたら、「かけっこ、運動場かな」と答え



る。「うん、そうだね」と言うと、次に彼は妙なことを言い始めました。「弁当持ってないかな、変なの。短いかな、この運動会」と言うのです。確かに、弁当がないというのは午前中で終わりということになるのでしょうか、彼は運動会というと、弁当をちゃんと持って来て食べるというイメージが強烈に焼きついているのでしょうか。しかし普通、絵の中に弁当がないことにはいちいち気がつかないし、無視しますが、彼はそうしないのです。なぜなのか、一生懸命に首をかしげるわけです。

またある図版には、リスのチロちゃんがお母さんに朝起こされている場面がありまして、ふとんが濡れているわけです。そして絵の上の方にトイレとか、他にも歯ブラシ、水道、洗面所が描いてあります。これは一目瞭然、おねしょしてお母さんに怒られている場面ですが、この絵を見せると、彼は「お母さん、チロちゃんを起こしている」。これは当たり前ですが、ちよどトイレの便器だけ描いてあるのを見て、「トイレのまる、開けるのがない」と言いました。「まる開けるのがない」というのは洋式便器のふたのことを言っているのでしょうか。「おかしい、おかしい」というわけです。またそれ以外にも「この絵、変なの」と診察室のドアを指さして、「ああいうところドアがない」と言うのです。当然、その絵にはいちいちトイレを囲むドアを描かずに、おねしょをしたことをほのめかすために便器だけ描いてあるわけです。それについて、彼は「ドアがないというのはおかしい」と言うのです。われわれがこういう絵を見てストーリーを描こうとする場合に、『トイレのドア』などはかえって連想のじゃまになり、どちらかというとなり方がよいかもしれません。ところが彼にとっては重大事であり、非常に関心の強いことなのです。どうもこういう点は、彼らが自分のまわりの世界をとらえようとする時の大きな特徴だと思えます。

私が大変びっくりしたのは、リスが三匹、縦に並んで走っている場面の絵を見せた時です。ただリスが三匹描いてあるだけですが、当然、普通は誰もが走っていると思うものです。彼にこの絵を見せたら、「地面はどれ?」「地面がわからんとおかしい」と言うのです。そして、「何か飛んでいるかな、歩いているか、どっちなわからん」と。だから苦し紛れに「飛んでから歩くっちゃんないかな、わからんね」と言うわけです。

この反応を聞いた時に、彼らの内的世界をかいま見たような気がしました。われわれが自分の回りの世界を捉えようとする時は、暗黙のうちにいろいろの了解事項、共通の基準、尺度などを持っていると考えられます。それによって自分の行動をどうしたらよいかを位置付けて、ふるまっているのです。例えば、ひとつの点があります。点だけを見ているとそれがどういう位置なのかわかりません。そこで、われわれは座標軸を設定することにより、点の位置というのを誰にでもわかるように明示できるわけです。つまりわれわれ自身の現実世界には、数多くの目に見えない基準、規範というものが設定されていることにより、自分たちの世界が秩序づけられ、成り立っていると考えられます。これについてわれわれは、日常的に意識することは全然ありません。ごく当たり前なものとして、日頃は意識に上らないわけです。そういうのを精神病理学用語では『自明性』と呼んでいます。その一方で自閉症の子どもたちというのは、そのようなわれわれにとって当たり前と思われる基準、規範をどうももっていない、もつことができない。そこに、彼らの心の最も大きな特徴があると思えます。

したがって先ほどの少年の例にあるように、トイレでいえばドアやふたがあるとか、運

動会では弁当があるとか、われわれにとって取るに足りないようなことをきちんと確認することにより、初めて自分の世界を秩序づけることができるのだと思います。

自閉症のお子さんたちに共通した最大の特徴は強迫的なこだわりだと私は考えていますけれども、このような行動は自分によくわかるように自分のまわりの世界を秩序づけるための営みとみなすことができるだろうと思っています。

もし、そういう秩序付けがなかなかできない場合にどんなことが起こるか。彼らの不安の背景にあるのはどういうものなのかを考えてみたいと思います。われわれは自分の回りの世界をいろいろな規範で位置づけていますが、それができなくなると、点でいえば座標軸がないことになります。そうすると、点の位置というのは瞬時のうちに変わるのだらうと思います。すなわち座標軸がなかったら、見る立場がちょっとでも変わればその点の位置は時々刻々変化し、決して同じ位置にはないことになります。同様に、彼らにとって自分の回りの世界というの、時々刻々常に変貌を遂げていると考えなくてはいけないと思います。そんな世界というのは想像しただけでゾッとします。大変不気味な世界だろうと思うのです。

冒頭にお話したように、それを彼らの過去の回想にかいま見ることができるのです。

ある2歳の男の子がいます。それまでテレビのCMが始まると、隣の部屋からとんで来て見ていた。そんなCMを2歳6ヶ月の頃から怖がるようになった。お母さんの背中に隠れて見るようになったというのです。こうした行動の変化というのは、誰でもよく経験することですけれども、あまり重視されていないようです。聞くところではだんだん調子を崩して、2歳10ヶ月の頃になると、お母さんが一生懸命何かさせようとしてもまったく乗ってこなくなった。ポーッと突っ立っていると言っていました。冬だったので、落ち葉がヒラヒラ舞い落ちるのをジッと眺めて、茫然としているらしいのです。そして、玩具を眺める時も何か斜めから見たり、いわゆる特異な自閉的視行動をするようになってきました。さらに、お母さんの顔をジッと接近して眺めるようになった。こうした行動というのは、おそらく今まで見ていた世界が変貌してきて、彼らにとって大変不気味な世界になったのだらうと推測されるのです。

またある例では、それまで人に言われたことを素直に聞く、いわゆる適応良好型の自閉症だったのです。17歳過ぎてから行動全体が極端にスローモーになり、食事が一切取れなくなってきた子どもがいました。始動がうまくいかない、エンジンのかからない状態になったのです。お母さんはそばで「早く食べてごらん」とか言うのですが、とにかく動かない。これを精神医学用語で『昏迷状態』といい、精神病の人などの急性期に現われる症状と同じです。この子が近頃赤ん坊の泣き声を特に嫌がり出して、施設に通うバスの中で赤ん坊が泣くといよいよバスに乗らなくなったり、女の子が泣いているともすごい苦痛な表情を浮かべて、目前の子どもを突き飛ばしてしまう。かと思うと、家でお母さんが電話している時に、どうも自分が話題になっているのを察知して、電話の受話器を自分の手でさえぎるという行動をとるようになりました。加えて、耳を自分の手でふさぐようにもなりました。このような急激な変化が起こってきました。どうもそれまでとは人の声の聞こえ方が変貌し、とても苦痛な感じで彼には響くようになってきたのでしょう。

今度は女のお子さんですが、12歳で初潮があつて緊張が高まったんでしょうか。さかんにおしっこをしたがるようになり、頻繁にトイレに行くわけです。また学校でも、友達に

何か言われると被害的に受け止めるようになってきました。家でお母さんが電話をかけていても、終わったらすぐ寄って来て、電話で何を話したのかを問いただすようになりました。さらに病院において、診察場面で私が始めに彼女に会った後にお母さんと会った時です。彼女は診察室の外の廊下で待っていました。すると、お母さんと話しているところへ突然入ってきて、「お母さん、私、何もしてないよね」と言い出すのです。とても被害的になり、自分のことを悪く言われているのではないかという思いが、急激に高まってきていたと思われます。

このような訴えは『僕は他の子どもから常に迫害を受けるんじゃないだろうかと思ってた』という、先の Bemporad の報告の内容と非常によく似ています。これまで彼らが見ていた世界とは何か変わってきて、そのために不可解な、恐怖と不安に満ちた行動を示すようになっていきます。丹念にずっとおつき合いしていくと、こういう現象には比較的よく遭遇しますが、あまりに悪くなってからしかお会いしないと、容易には理解できない世界だろうと思います。

日頃お付き合いする中で突如起こる異様な変化こそ、彼らの心を解き明かす重要なサインだろうと思います。いろいろな要因によって彼らの世界が変容していくのを、私は『知覚変容現象』と命名しました。それは先程話したようなことが関係するわけです。そしてなぜ彼らの見る世界が容易に変容するのか、それに伴って、なぜ彼らは動揺するのか。その起源があると思います。幼児期と思春期とは急速に中枢神経系の発達が進展する時期ですから、自分の中にこうした変化が起こりやすいものです。それと同時に、思春期以降にてんかん発作を起こすお子さんがとても多いのですが、それも引き金になります。それに加えて初潮という生物的な変化や、家庭内が混乱状態を呈してきても彼らにとっては急激に世界が変わるきっかけになります。何しろ当たり前と思われる日常の出来事でも、大きなきっかけになることがよくあります。こういう変化は一過性の場合も結構ありますので、つい見過ごしてしまうようです。

こういう知覚変容がなぜ起きるのか教えてくれたのが、次に話すお子さんなんです。私がお会いしたのは17歳の時ですが、思春期になってから異性に対する関心と、小さい時から好きだった漢字や文字に非常に愛着が強まってきました。その中で『九州電力』という文字が気に入っていて、『九』『州』『電』『力』というそれぞれの文字を生き生きとした姿で捉えるようになってきました。そして『九君』『州君』と呼ぶようになったのです。具体的には人形の絵を描きまして、首から上に『九』『州』という文字をつけて、まさに生き物であるかのように捉えるわけです。

こういう捉え方を相貌的知覚と呼びます。辞書を引くと、生命を持たない物に人間と同じような表情、動作などを表わすことをいいます。例えば太陽が笑っているとか、微笑んでいるとか、踊ったりしているという捉え方です。実は小さい子どもはそのような捉え方をする傾向をもちます。古代の人は森羅万象、あらゆる自然物を生命が宿っていると捉えて、奉っていたわけです。そういう習性が人間には小さい頃にはよくみられます。脳に外傷を受けた人にも出やすいのです。

自閉症の人達も、同じように物事を捉えやすいのだろうと思っています。

この人は、ある日『九君』『州君』を卒業して『富士君』（寝台特急）と言い出しました。『富士君』はたくさんの客車を引っ張って頑張っている、たくましいと言うのです。

また始まったかと思ったのですが、そのきっかけが非常に興味を引きました。彼女は障害者をたくさん雇っている店に就職していますが、そのオーナーというのは、バイタリティや包容力があって、とても魅力的な女性なんです。その方が仕事で東京に出張に行かれた時、富士号に乗った。その翌日から富士号のことを『富士君』と言い出したわけです。それは何かというと、そのオーナーの方がたくさん障害者を力強く引っ張ってくれている。そんな「力強い」オーナーに抱いた感じ方と、いつも親しみを込めて見ていた、たくさん客車を引いて毎日働く富士号の「力強さ」とが一致して、『富士君』になったと考えられます。

この捉え方は大変に重要な意味を含んでいると思います。これについて、乳幼児心理学の世界で最近明らかにされています。赤ん坊は外界を捉える際に先程話した相貌的知覚—まわりの世界を生き生きと情緒的に捉えるだけではなく、専門用語で vitality affect (生き生きした情動) といって、怒りや悲しみなどの通常の分化した感情と異なり、力動的に身体全体で感じ取る感じ方というのを人間は本来もっていて、それが赤ん坊の時に活発だと述べています。力動的にしか捉えられないという感じ取り方なのですが、例をあげると「押し迫ってくる」「移ろいやすい」「情感をそそる」「ほとぼしるような」という言葉で形容されるダイナミックな性質の情動をさします。これには自分の身体の生理的な状態が密接に関係してきます。それを教えてくれたのは、彼女の職場におとなしい子が入ってきて、自分の領域を侵されたものですからその子を突き飛ばしてしまった時です。私は「これはいけない」と思って、お薬を出しました。そうすると鎮静効果はありましたが、彼女は「身体がだるい」と言い、3週間後には「町を歩いているとまわりの人が冷たい視線を自分に向けてる。みんなから見られている」と言い出しました。彼女がいつも面接の時に持ってくる台紙に明朝体の『富士』の漢字が貼ってあったのです。その『富士』の『土』の漢字を見ると、上の横棒の右角に三角形の形ができますが、その三角形を指さして「富士君は自分を見ている」と言うわけです。

薬によって身体が非常にだるくなって、仕事もうまくできない。そんな生理的な変化によって仕事もうまくできなくて非難されたような気持ちになったのでしょうか。それが外界を見る際にも反映して「富士君が自分をにらんでいる」と反応したようです。

これはまさに生き生きした情動の特徴をよく示しています。自分の生理的な感覚が外界を見る際に大きく反映する。つまり、自分のまわりの世界—自分—他者が渾然一体となって区別できないまま捉えてしまう。こうした赤ん坊に特徴的な知覚された世界がずっと続いていたら、彼らが大きくなった時にどういう問題を抱えるようになるのか。どんな治療をすると彼らの症状が良くなっていくか、これから話してみようかと思えます。

#### IV. 具体的な症例から学んだこと

##### (1) 成人期の例

成人になって就職していたが、家庭の不幸が重なって関西から大分に帰ってきたという方です。主訴は、まわりの人はきれいで自分は醜い。特にお母さんは若くてきれいだと思います。自分の容貌に対するコンプレックスが凝り固まって、いわゆる妄想状態になった

ケースです。確かに、お母さんは当時60歳前後だったけれども、一緒にお会いしたサイコロジストの女性が「40歳ぐらいに見えました」というくらい若くてきれいな方でした。

本人（女性）は人の視線が怖くて視線を合わせられないのです。このことはよく理解できるのですが、びっくりしたのは、まな板に刻印された魚料理用のマーク（魚の単純な絵）を見て、そこの魚の目が怖いというのです。そのため彼女は必ず魚のマークが書いている面を裏にするのです。メンソレータムの容器に看護婦さんの格好をしたかわいい女の子の絵が書いてありますが、その子の目も怖いというのです。目の前にいる人々の視線だけでなく、魚のマークの目のような物が生き生きとしたものとして飛び込んでくる、そんな状態でした。

ご主人がなくなられるし、娘の状態が悪くなって就職も中断し、頼りになる人もほとんどいない所に帰らざるを得なくなり、お母さんは世間体を気にして悲観的になっておられました。このお母さんと彼女の間には強い緊張がありまして、お母さんに対してものすごく攻撃的になり、罵倒するという状態が続いていました。バスの中でも大変なことがあって、通院自体も大変なんです。どんどん二人の関係はエスカレートして、かなり治療は難渋したのですが、2週間に1回の面接で60回過ぎたころから徐々に本人の症状が落ち着いてきました。その時点で、やっとお母さんが自分を語ってくれるようになりました。

お母さんは今まで娘に夢を託していた。その夢も破れ、頼りにしていた夫をなくし、傷心の状態だったわけです。そういうお母さんの気持ちをどう援助するかが主な治療になったと思います。実はお母さん自身、学生の頃に熱心にダイエットをしたようです。昭和30年頃で、主治医からは「思春期やせ症のはしり」と言われたようです。当時、極端なダイエットをするというのはよほどのことだろうと思います。このお母さんは結婚する前にファッション関係の学校に通っていて、大変ファッションナブルな方です。またこのお母さんの母親という方が大変有能で、そのために母を見習って、自分も高い理想を掲げてやってきた、大変努力家なのです。そういうお母さんなものですから、娘に対しても多大な期待をかけていたようです。学習援助を一所懸命やり、子どもの学校のためだったら奔走し、就職のためなら学校の先生と一緒に捜し回わり、まわりの人からは「お宅のお嬢ちゃんは将来楽しみです」と将来を囑望されていました。しかしご主人がなくなられ、そのためにお母さん自身は大変な挫折があった。そんなふうにお母さんが若い頃のことや、挫折体験を話すことができるようになって、やっと肩の力が抜けてきた。そういう面接の後から、本人はメンソレータムの女の子をこわがらなくなったのです。

さらにびっくりしたのは、なぜこんなに人の容貌を気にするようになったかを、この自閉症の娘さんが自分の方から語ってくれたのです。だいたいのことはお母さんから聞いていたのですが、本人は「高校2年の時にみんなの顔がキリッとなって、私の顔だけダラツとなってから、みんなの顔を見れなくなった。」さらに「当時、唯一友達だったKさんの胸の大きくなったところが体育の時間に見えた。」と言いました。そのために『自分だけ醜い、まわり的人是にきれいだ』という想いがエスカレートしていったようです。

極端なダイエットをして思春期やせ症になる方はみんな、女性であることや母親になることに対して葛藤が強い方なのです。容姿へのとらわれが非常に強いというのは、女性らしさをどう獲得していくかをめぐる問題があったのだろうと思います。お母さん自身、治療の後半に「私は今でも、胸の大きなお母さんを見ると嫌悪感をもよおす」ことがあると

言われました。つまり、母親らしくなることに対してかなり葛藤が強く、それが娘に伝わって、娘自身が思春期に女らしくなっていく際に、友達も女らしくなっていくけど自分はだめだ。そんなコンプレックスがずっと尾を引き、エスカレートして妄想状態になったということなのです。重要なのは娘さんがそのことを語った直後から、びっくりするような変化が起こったのです。それまで採血、歯医者通い、外出などを徹底的に拒否していたのですが、この面接の後、自分から進んで採血を受けたのです。言い換えると、今までのとらわれから解放されて、外に出て行く勇気が湧いてきたと考えられます。私はこの変化には大変驚きました。そういう状態になってはじめて、お母さんは自分の娘の変化を嬉しそうに話ながら、「つくづく娘と私は一心同体だと思う」と話されました。

## (2) 青年期の例

次に11歳の少年の話をしてします。「人にかみつから脳波をとってもらいなさい」と学校の先生に言われたと、お母さんが連れてきました。非常にこだわりの強いお子さんで、私がお会いした中でも大物三人の中に入ります。診察の時、私に会うなり『次回はいつか』要求する方は多いのですが、その子は自分で次回の診察日を決めてしまうのです。私の予約を見てすぐに「2月28日」と言うてくる。その日都合が悪くて「3月7日にしよう」など言うと、かみつかりますから大変です。私のペンを持った手を押さえつけて『とにかく書け』とやるわけです。それほど激しかったケースです。

そんな坊やが劇的な変化を遂げるようになったきっかけというと、たくさんの事情があったのですが、お母さんが『この子のことは私がみるのだ』と、今まであったいろいろなとらわれをかなぐりすてて一大決心されたのです。それがきっかけになって、お母さんと子どもの間で、冒頭に話した『依存』関係が初めて芽生えたのでしょうか。こうした関係ができた途端、おもしろいように次々と行動変容を遂げていきました。お母さんによると、最初に『お母さんといっしょ』というTV番組を見て、体操の模倣をするようになった。するとどんどんこだわりが減っていったと言います。12歳にもなると、他のまわりの子どもに関心を持ちだして、そして学習にも一所懸命取り組むようになってきたようです。中学1年の時ボーイスカウトに入り、同じ年頃の子も達と一緒に活動するようになりました。それと同時に、お母さんが家の中でするいろいろなこと（家事）を一生懸命に見て、自分でもやり出した。創造的な活動に没頭するようになったとも言われました。以上のような変化が起きて来る中で、中学2年の時にボーイスカウトの合宿で生まれて初めてお母さんと離れて生活したり、まもなくお母さんが病気で入院したことが契機になったのでしょうか。親から離れていき、いわゆる心の自立ができるようになったわけです。

この子どもはお母さんとの間で甘えられる関係ができて初めて、模倣したり、学習、創造的活動や、同じ世代の子ども達と共に活動することに関心を持ち出す。それにつづいて、お母さんと離れてひとりでやっていく自信ができてくる。こういうプロセスは、通常の子どもの発達ではみんな当たり前のことです。つまり誰でも、こういうプロセスを必ず順序立てて、進展していくということを私に教えてくれたのです。

これらの二例から何を学んだか。突き詰めて考えると、母—子という形で代表しますが、人と人が心のつながりをもつ際には、いろいろな人間のしがらみ、とらわれ、偏見、欲などがたくさんあります。そういうものをかなぐり捨てて、自分の身ひとつで子ど

もに対峙した時に初めて、母と子のつながりの原点が生まれるのだと思います。私としては、危ないと思うお子さんとか、自閉症でもさまざまな問題を起こしているお子さんの場合には、今話したような、お母さんと子どもとのつながりが何らかの形ででき上がるきっかけをつかむことは大変重要だと思うわけです。それでは次に、小さいお子さんの場合はどうしたらよいかという話に移りたいと思います。

### (3) 幼児期の例

自閉症ではないかと連れてこられた2歳10ヶ月のお子さんです。10ヶ月頃には言葉をしゃべり出して、始語は早かった。11ヶ月の時、パートタイマーで働いていたお母さんは、職場で常勤の人が病気で倒れたためにフルタイムで働かなくてはいけなくなった。家事はあまりできなくなるし、1歳3ヶ月の時、お母さんは第二子を妊娠した頃にご主人の浮気が発覚したらしいのです。そして非常にひどいつわりで、2ヶ月間床に臥してしまったそうです。その時1歳6ヶ月くらいだった自分の子どもがおしっこしたり、うんちするのを見ると、ひどく嘔吐をするようになったのでした。自分がおなかを痛めて産んだ子どもだけれども、浮気したご主人との間にできた子どもなので、想いは複雑だったと思います。そこで、ご主人に対する憎しみを子どもに投影する。一般的に、母親にとって子どもの排泄物は子どもからの贈り物のようなものですから「よく出た」と言ってほめてやるものですが、かえってそれがひどい嘔吐を誘発するわけです。それから子どもがおかしくなってきました。後追いしなくなる、カルタをきれいに並べ始めたり、2歳を過ぎると視線を避ける、手をかざして見るようになったり、ひとりでうろうろしたり、典型的な自閉症の症状が出てきた。明らかにお母さんの精神衛生面が危機的な状態になったことが発症の契機と考えられます。

とにかくお母さんと子どもが楽しく遊べるように、そのためにはお母さんの精神衛生状態を良くするように努めざるを得ないわけです。最初、お母さんと子どもに遊んでもらいまして、それをビデオに撮って分析してみました。そうすると、お母さんは子どもがいろいろ行動しますと、何をしたいのか、してもらいたいのかさっぱりわからないといった態度をとられる。「何なの?」「何?」と聞く形でしか対応できないわけです。母親と子どもの間で交流はまったくずれてしまっている様子です。同時に、お母さんとのカウンセリングで大変な想いをお聞きしました。楽しく遊べるようにと、学生の援助などを借りながらやっていったのですが、2~3回すると、お母さんがそばにいてくれて、自分を受け入れてくれそうだという想いがあったのでしょうか、ベターッと甘えるようになってきました。

ところがその後はなかなかうまくいかなくて、例えばキャッチボールをしますと、お母さんがボールを投げてやる、子どもがあっちの方に投げてしまう。そうすると「だめじゃないの」と、必ず評価してしまう関わりしかとれなかったのです。お母さんも大混乱状態だったでしょうから、そんな状態がしばらく続きました。しかし、だんだん子どもの行動にお母さんが合わせられるようになっていきました。最初お母さんは教育的態度で何かを教えようという知的な遊びをしていたのですが、少しずつ遊び方が変わってきて、ダイナミックにマットやトランポリンといった遊びに変わってきました。しだいにお母さんと子どもの間で波長が合うようになってくると、子どもはどんどん変わってきました。お母さ

んが「ヨーイ」と言うと子どもは身構え、「ドン」と言うと駆け出すというふうに、二人の呼吸が合うようになってきました。こうなってくると言葉はまったく出ないのですが、お母さんの指遊びにもものついてくるようになったのです。

一般的に自閉症だから子どもとお母さんとの間、ないしは人との間で心の交流が育たないと捉えられていますが、こうした母子間の変化を見るとそのような考えは間違っていると思います。

## V. 自閉症の治療における情動的コミュニケーションの意義

今までお話したように、成人—青年—幼児をどうつないでいくかというのは非常にむずかしいことです。冒頭で話したように、彼らはまわりの世界を自分なりに秩序付けて見るのができにくいのです。われわれは認知機能によってまわりの物を秩序付けて、安定した物として見て、そのおかげでいつも比較的安定した行動を自分がとれていると思います。

認知能力に自閉症の一番の障害があるといわれていますが、認知自体、どういうプロセスで生まれてくるか、よくわかっていません。単に『認知機能が障害されているからとにかく言葉を教えよう』では、けっしてまわりの世界を秩序付けて見ることができるようにはなりません。言葉をかなり自由に駆使できても、まわりの世界を見る時にちょっとしたきっかけだけで変容を遂げていく世界になってしまう。非常に基盤が脆いわけです。その基盤がどうやってできていくのか、そのプロセスを明らかにしてそれに沿ってどんな援助をすべきなのか、先程の2歳の子どもの例が教えてくれるだろうと考えています。

相貌的知覚や生き生きした情動のように、赤ん坊がまわりの世界を知覚する際に特徴的とされる知覚の仕方がとても強い自閉症の子ども達の場合、自分のまわりの世界が何を意味しているかよくわからないわけです。その際に何を手がかりにするかという、これは赤ん坊の世界でよく知られているように、母親を手がかりにするのです。それは『母親参照』と呼ばれています。つまり自分にとって予期せぬ、不可解な状況が生まれた時、お母さんがどういう状態や雰囲気にあるのか、お母さんが「大丈夫だよ」と安心できるサインを送っているのか、またはお母さんが「ちょっとやばいよ」というサインを送っているのかを手がかりにして赤ん坊は安心できるのか、不気味なものなのか、判断する拠り所になっているというのです。

つまりお母さんを手がかりにして、まわりの世界を意味付けることができるためには、お母さんと子どもの心の波長が合わないといけない。そういう関係があって初めて、お母さんを手がかりにできるのです。それは一緒に遊んでいて何か楽しい想いをお母さんと子どもが共有する中で、お母さんが投げかけるいろいろな言葉や意味を、子どもは自分もお母さんと一緒になってその世界を意味付けられるのだと思います。

この世界というのは極めてとらえにくいものではありませんが、情動的で、言葉が生まれる以前の世界です。コミュニケーションというとわれわれは通常、自分の考えていることを相手に伝える、相手の考えを自分に伝わるやりとりだと言われています。しかしコミュニケーションとは、その基盤に情緒レベルで感情を共有している関係ができていくことが



重要なのです。これが基盤になかったら、いくら言葉でやりとりしたとしてもきわめて空虚な世界なのです。つまりコミュニケーションというのは、ある考えのやりとりの他にその基盤に情動を互いに共有し合う、二重構造を有していることを忘れてはなりません。気持ち共有できるには、いろいろなとらわれやしがらみから脱却して子どもと裸で付き合えるような心の状態にあることが大切です。それが土台にないと、いくら学習を積んで言葉を覚えても、脆くて空虚であったり、ちょっとしたことがきっかけでとてつもない不安の世界に陥ってしまいます。

## VI. おわりに

心の自立を考える場合、われわれは心の拠り所をどこに求めるのか。通常は意識しないのですけれども、自閉症の子ども達というのは人間が根源的にもつ不安の中でも、究極のものを常に抱え込んでいるのだらうと思います。だから彼らの治療を考えるには、もちろんソーシャル・スキル・トレーニングやいろいろな学習の援助は必要です。けれども今まで話したようなことが基礎にないと、彼らを鍛えようとすればするほど、逆に彼らを苦境に追い込むことになると思うのです。彼らは本来、エネルギーをもっている人が多いと思います。こだわるエネルギーはものすごいですから、それをこだわらなくても安心できる状況になった時、おそらくすべての子どもにおいて、テンポは違うにしても赤ん坊が成長していくようなプロセスを経て、究極的に心の自立が達成されていくと思っています。

自閉症と呼ばれている子ども達に接していくことによって、ただ彼らを援助するだけでなく、われわれが人間として一番大切なのは何なのかを教えられると思っています。

ご静聴ありがとうございました。